

日本語と英語

藤田 永祐

(1)

数年前のこと、雑踏する街の通りを歩いていて、どこからかベートーベンのピアノ協奏曲「皇帝」が流れてきたことがあった。周囲の猥雑さが楽曲の優美で堂々とした品位とあまりにも対照的で、それがかえって楽曲の高雅さの鮮やかな引き立て役となり、心が洗われる思いがした。それは偶然の、つかの間の感興にすぎないが、演奏会場での改まった鑑賞とは異なる趣があって、散文的な日常生活の一服の清涼剤となった。

はなしは変って社会的、政治的な関心ごとの話になる。

先日福島第一原発事故をめぐる裁判で東京電力の旧経営陣に無罪判決が出た。ところで、原発事故の責任問題となると国は関わっていないのだろうか。原発は国策として推進され、それに呼応して民間企業が参入する。何もないと国は援助し、何かあると企業の責任になる。

そもそも東京電力の旧経営陣の無罪判決自体が多くの市民にとって、納得がいくものではないだろう。旧経営陣の責任はうやむや、国の責任もうやむや、すべてはトカゲの尻尾きりである。

釈然としない。

近年こうした類の想念に心が捉われてしまうことが多くなったが、そんなとき心に浮かぶセリフがある

お役柄を尊敬いたします！地獄の裁判庭では、
悪魔も判事の役を勤めることがあります。

(『尺には尺を』第五幕第一場)

シェークスピアの *Measure for Measure* の中のセリフで坪内逍遙の訳である。エリザベス朝からジェームズ朝にかけての、あの華やかな時代に、シェークス

ピアは世の不条理をかずかず味わたっただろう——いつの時代にも似たようなことがあったのだ——そんな感慨が引|かかりを覚える心には癒しになるのである。

散文的な日常生活の一服の清涼剤である。

ところで、この研究ノートの趣旨は日本語と英語の使われ方に関する一考にある。

上記のセリフの原文を記したい。

Respect to your great place, and let the devil

Be sometime honored for his burning throne.

小田島雄志の訳は

偉大な判事の座に経意を表します！悪魔でも

地獄の法廷の座にあれば敬意を受けてしかるべきです。

(白水社 2012年)

松岡和子訳は

偉大な判事の座には敬意を表します。もっとも

悪魔でも地獄の玉座にあればたまには尊敬的になるでしょう

(ちくま文庫 2012年)

筆者がこの作品に初めて触れたのは二十代はじめの頃で、坪内逍遙訳であった。そのためもあってか、逍遙の訳がもっとも味わい深いように思う。

シェークスピアの作品は訳者によって決して小さくない意味や趣おもむきのちがいが生じる。そして、どんなに優れた訳でも、原文のもつ伸びやかさ、含蓄性や多義性は失われてしまうのである。したがって原語で鑑賞できればそれに越したことはないのであるが、教養のある英語母国語者でもない限り、そんなことはかない望みでしかない。早いのはなし先の原文一つとっても、非英語母国語者である私たちが、原文といくら長いことにらめっこしていても、邦訳（坪内訳であれ、小田島訳であれ、松岡訳であれ）に対して覚える、くつろいだ十全な理解感が生じようがない。

幼児期から習い覚えた母国語はその人の精神そのものになる。後年習得した第二言語、第三言語は決してそうはならないのである。

ドナルド・キーンは初めて日本に暮し始めてまもない頃、英語に一切触れない決心をして生活する。そんななか事情があつて、シェークスピアの演劇を友人と一緒に観ることになる。すると、その英語の素晴らしさに感動し涙があふれ出て、止めようがなかったのだつた。そう述懐している。

ジョージ・ギッシングは『ヘンリ・ライクロフトの私記』の中でこう言う。

私がイギリスに生れたことを嬉しく思う多くの理由の中で、最初にあげるべきものの一つは、シェークスピアを母国語で読むことだ。かりに自分が、彼と直接の親交に入ることができず、ただ遠くのほうから、しかも理解の努力を払わなければその生きた魂に触れることを許されない言葉で彼が語るのを聞くにすぎないと想像するとき、私は心が寒くなる落胆と、わびしい喪失の気持に襲われるのだ。(夏 27)

(中西信太郎 訳 新潮文庫)

(2)

散文の小説では、韻文の戯曲ほどには原文と翻訳文とに大きな相違は生じない。

ジェーン・オースティンの小説は、シェークスピアに比較すれば、はるかに邦訳の試みが数少なく、改善、推敲の余地がより大きく残されているとってよいと思う。

日本語と英語の世界を行き来して、一方を片方に置き換えようとして戸惑うのはよくあることだろう。その戸惑いはしかも、文法書も辞書も、そのいずれに当たっても往々にして解消しないのである。

オースティンの最初の小説『ノーサンガー・アビー』を読んでいて、そんな戸惑いを覚えた箇所センチメンタルノベルの二、三を、第一巻の二章と四章から拾ってみたい。

以下の引用文には当時流行っていた感傷小説のパロディが織りこまれている。

Every thing indeed relative to this important journey was done, on the part of the Morlands, with a degree of moderation and composure, which seemed rather consistent with the common feelings of common life, than with the refined susceptibilities, the tender emotions which the first separation from her family ought always to excite. (chap.2)

(試訳)

ヒロインがバースへ旅立つというこの重大な事態に際し、モーランド家の

面々はすべてのことを驚くほど落ち着きと節度をもって振舞った。ヒロインが初めて家族と別れる折には、必ずや洗練された感受性が呼び覚まされ、繊細な感情が掻きたてられるであろうが、モーランド家の対処の仕方は、普通の生活の普通の感情にむしろ見合っているように思われる。

下線部分であるが、最後の単語 ‘excite’ は ‘the refined susceptibilities’ と ‘the tender emotions’ 両方にかかっている。‘excite’ を「掻きたてる」と置き換えると、この日英の二つの言葉の意味はほぼ同じだが、コロケーションが異なり、すっきりした和文にするには一工夫必要なのである。

参考までに現在書店やネットで手に入る邦訳を取り上げてみたい。

中野康司訳は、

ヒロインが生れて初めて家族と別れるときにかきたてられる繊細な感情と思いやりとは、まったく無縁なものだった。 (ちくま文庫 2012年)

中尾真理訳は、

それはヒロインがはじめて家族から離れるときに必ずかき立てることになっている、例の洗練された感受性だとか、優しい感情よりも、むしろ普通の生活の、普通の感性にふさわしいように思われる。 (キネマ旬報社 2003年)

‘susceptibilities’ を「感受性」と置き換え、‘emotions’ を「感情」と置き換えると、‘excite emotions’ は「感情を掻き立てる」となって、日本語として自然な言い回しになるが、‘excite susceptibilities’ の方は「感受性を掻き立てる」となって、自然な言い回にならない。「感受性」という言葉のコロケーションは「掻き立てる」を許容しないのだ。この ‘excite’ は ‘arouse’ と同義だから ‘excite susceptibilities’ は「感受性を呼び覚ます」が妥当かと思う。英文と異なって和文の方はコロケーション上、「感受性」と「感情」にかかる言葉を別にする必要があるのである。こうした技法は邦訳の際の心得の一つと思う。

次に、同じことを言っているのだが、日本語と英語で表現がちがうために、多くの人がちがう内容を意味していると勘違いしている例を挙げてみたい。

日本語では「精神的ショック」という。このコロケーションを英語に当てはめて spiritual shock とか mental shock とすると、不自然な、妙な英語になる。自然なコロケーションは emotional shock である。これを日本語に置き換えて「感情的ショック」と訳すと（実際にそう訳している翻訳書が珍しくないのだ

あるが)、欧米人のショックのありようと日本人のありようとは異なることになる。無論そんなことはありえないのであって、「精神的ショック」と *emotional shock* は同じことを意味していて、コロケーションがちがうだけなのだ。

言語というものは約束事で成り立っているのが分る。分りやすい例をとるなら、

日本では鶏は「コケッココー」と鳴き、犬は「ワンワン」と吠えることになっている。同じ鶏が欧米の地を踏むと、「コッカドウドウルドゥー (*cock-a-doodle-doo*)」と鳴いて、犬は「バウワウ (*bow-wow*)」と吠え出すわけではないのである。

和文に置き換えると意が通じなくなるような英文の表現に出くわすことがままある。その場合一つの方法として、原文の意を汲んだ、文脈にマッチする和文を創ることになる。

例を挙げてみたい。

以下は物語のヒーロー、ヘンリー・ティルニーと、ヒロイン、キャサリン・モーランドの会話である。

“As far as I have had opportunity of judging, it appears to me that the usual style of letter-writing among women is faultless, except in three particulars,”

“And what are they?”

“A general deficiency of subject, a total inattention to stops, and a very frequent ignorance of grammer,”

“Upon my word! I need not have been afraid of disclaiming the compliment. You do not think too highly of us in that way.” (chap.3, p.20)

(試訳)

「これまでわたしが判断してきた限りでは、女性の記す手紙文は、普通は完璧に思われます、三つの点を除いてですが」

「三つの点とは？」

「一般的に主題がないこと、終止符に無頓着なこと、しばしば文法を無視していることです」

「あらあ！なんてお返事しようか気をもむ必要なってなかったわ。あなたは女性の書簡文を高くかってなんかいらっしやらないもの」

中野康司訳

「ぼくが見たところ、女性の手紙の書き方は、三つの点を除いて完璧だと思います」

「三つの点というのは？」

「主題の欠如、句読点にたいする無神経さ、文法の無視、この三点です」

「あら、あなたのお世辞を辞退する必要なかなかったわね。あなたは女性の才能をそんなに高く評価していませんもの」 (ちくま文庫 2012年)

中尾真理訳

「私が見るかぎりでは、女性の間で普通に見られる手紙のスタイルは完璧だと思いますね、三つの点を除いては」

「その三つとは？」

「総じて主題が欠けていること、止まるところを知らないこと、それにしばしば文法を無視することですよ」

「おやまあ！お世辞だなんて恐縮しないでよかったのだわ。そのおっしゃりようでは別に、私たちのことを評価してくださっているわけではないのですね」 (キネマ旬報社 2003年)

原文 ‘I need not have been afraid of disclaiming the compliment.’ の ‘disclaiming’ を「否定する」と置き換え、‘compliment’ を「お世辞」と置き換えると ‘disclaiming the compliment’ は「お世辞を否定する」となる。この訳、ないし工夫を加えたこの訳のヴァリエーションは、意味がよく分からぬばかりか、会話の自然な流れを中断してしまう。

‘disclaiming the compliment’ が言わんとしていることは、キャサリンは、ヘンリー・ティルニーが女性の手紙文にお世辞を言ってくれるものと思いきりでいて、それに対し「そんなことありませんわ」とか「それほどでも」とか、否定する言葉を返す心づもりでいたのだが、ヘンリーはお世辞どころか手厳しい意見を言ったので、思惑は外れて、返答にあれこれ気を使う必要ななかった、ということだろう。キャサリンのセリフは極めて凝縮された内容のもので、原文に沿って日本語に置き換えるのは至難の業といってよい。